

学兄 大谷さん

難波秀利

立命館大学理工学部

namba@se.ritsumeai.ac.jp

平成 27 年 1 月 6 日

大谷さんは学習院大学理学部化学科の七歳年上の先輩であり、包容力が豊かで、心の温かい大きな学兄でした。大谷さんは学部卒業後に村田好正先生が担当されていた物理化学研究室の副手をされたのちに大学院に進学していました。当時の理学部ではホームルームといって、入学してきた学生を各研究室にホームルーム生として帰属させ、入学後の学業、大学生活等について学生が教員・諸先輩と話しやすい環境がつけられていました。私は入学後、村田先生のホームルーム生となったので、それ以後、大谷さんが名古屋大学プラズマ研究所の助手に就任されるまでの間、そしてその後は同窓会も含めたいろいろな場面で偉大な先輩の姿を学ばせていただきました。私が入学した昭和 43 年というのは 10 月 21 日の国際反戦デーに新宿で騒乱罪が適用された事件が起きた年であり、学習院大学においても学内が騒然としたことが何度かありました。かなり後になってから、大学紛争時のあれこれについて話を伺ったことがあります。

私が大谷さんと間近に接することになったのは卒業研究で村田研究室に入門した時からとなります。卒研時代で明確に覚えていることが二つあります。一つはゼミの洋書購読で Mott-Gurney の *Electronic Processes in Ionic Crystals* を読んでいた時で、光吸収の遷移確率の理論で電磁波のベクトルポテンシャルの発散を無視する近似の意味が分からなかったときに大谷さんからそれはクーロンゲージという選択であり双極子近似を意味するのだとアドバイスをもらいました。大谷さんは普段は卒研ゼミに口をはさむことはなかったように記憶していますが、この時は違いました。それに対して村田先生が「これがそうなの」というような意味のことを言われました。なぜか、この時の様子は今でも鮮やかに覚えています。先生も知らないことを先輩が

知っていたと私が誤解したのかもしれませんが、先輩と先生が対等に話をされたことに驚いたということだと思っています。今となっては当たり前のことですが、私には初めて目にする光景であったように思います。この近似の話は私が立命館での光吸収、光電子分光の講義に際して何度も話す機会がりましたが、その度にその時の光景を思い出していました。

二つめは、学習院大学理学部工作工場での大谷さんの姿です。村田先生の教育の方針の一つに自分のアイデアを自分の手で実現できる力を身に付けることが良い研究につながるということがあります。研究室に入ると男女にかかわらずに工作工場に通わされ、旋盤、フライス盤、ボール盤などで実験に必要な部品を作ったり、装置開発を教え込まれます。物理科の木下是雄先生、近藤正夫先生、川路紳治先生の研究室でもこの精神が共有されており、工作工場はそれらの研究室の助手、大学院生、卒研生の交流の場となっていました。工場は浜野正良工場長という職人気質の方が統率されており、機械加工の指導はもとより、もの創りの精神が教え込まれていました。時間外になると工場は各研究室の助手と大学院生が工場長を囲んで研究、教育から人生論などを語り合うたまり場にもなっていて、大谷さんは常にその中心になって全体の雰囲気をつくりだしておられました。そのおかげがあって私や同級生もその輪の中に入ることができたように思います。当時を思い出すと、卒研生にとっては先生に与えられたテーマに沿って装置を製作したり、実験データを出すのが精いっぱいというか、目の前にあることをやっているだけでしたが、ドクターの院生や助手の方たちが熱っぽく話しているのはそういうことから離れて、研究のスタイルやポリシーなどについてであり、研究の求道者としての先輩方の本音の語り合いを聞くこ

とができたと思っています。当時はすでに東大・安田講堂の紛争から3~4年は経過していましたが、大学はどうあるべきか、教育はどうするのが良いか、社会の在り方などについて立場や、年齢を超えて話し込むことが多くありました。工場長の浜野さんは典型的な職人さんであり、もの創りの作法であるとか、精神であるとか、かつてご自身が技術を高めていったときにどのように壁を乗り越えていったかなどをよく話してくれました。大谷さんは浜野さんの直弟子のような存在であって、とくに親密な付き合いをされていました。私もそういう姿をみて、真似をしようとしていたことを覚えています。とても同じようにいくものではありません。大谷さんは豪快な先輩で、おおらかでありましたが気づかいの方でもあり、大谷さんの人柄があって初めてそのような付き合いができるものであるという、これも大谷さんから学んだことの一つです。

大谷さんのドクターワークは低速電子エネルギー損失分光の装置開発と、それによりNi単結晶清浄表面に酸素が化学吸着し、初期酸化していく過程を解明したものです。私と同学年の寺田啓子さんはマスターの時、大谷さんと共に実験をしていて非常に良い刺激を受けていたようです。私自身は大谷さんとペアーを組んで仕事をしたことはありませんでしたが、不思議とアルコールのある席ではかなりの確率で一緒にさせていただきました。当然、大谷さんとはいろいろな話をしたことになりますが、私とは比べようもなく大きなスケールの先輩でしたので、兄貴の話を聞いている弟の気分であったように思います。もしかしたら大谷さんも弟分と思ってくれていたのかもしれませんが。

学習院は沼津に大きな寮があり、村田研究室では年に一度、寮に合宿し論文紹介するイベントがありました。論文ゼミは朝から晩まで寮に缶詰めになって行われ、終わるとお酒を飲みながら談笑するというもので、先生から卒研生までが全員行いました。発表者は持ち時間があるようなないような雰囲気、質問攻めにあい、わかるまで追いつめられるので、当番が終わるとへとへとになるという過酷なものでした。またゲストが参加することもあり、プラズマ研究所に移られてから大谷さんも何度か参加されていました。ゼミではまったく研究分野の異なった話を聞くことが多く、頭をよくする意味もちろんあったでしょうが、



写真1 村田研究室恒例の学習院沼津寮での論文ゼミでの発表風景

頭を強くするためだと大谷さん、もしかすると村田先生からかもしれません。伺った記憶が残っています。また、夏には同じ場所で合宿も行われていました。こちらのほうは秋からの実験に備えた体力強化が目的(?)であり、論文攻めにあうことはありませんでしたが、日が暮れると飲み会が始まり、エンドレスで飲まされることになります。この場の主人公はもちろん大谷さんであり、いろいろと楽しかったことが思い出されます。ゼミの一幕の写真をご覧ください。写真1は大谷さんが発表中の様子で、写真2は発表を聞いて黙考中、あるいは、睡魔に襲われている時のものです。なお右端は筆者です。記録には1972年とありますので大谷さんがドクター在学中の写真です。



写真2 論文ゼミ聴講中の大谷さんと筆者

今振り返って思い出すと大谷さんは日ごろのゼミだけでなく、実験指導などすべての場面で出来の悪いわれわれ後輩に対してなんでこんな簡単なことがわからないのかといったような態度を見せたことは一度もなかったように思います。私などは今、学生に接しているといつそのような気分におそわれる時があるので恥じ入るばかりです。大谷さんは先輩として偉ぶったところがありませんでしたが貫禄十分で、後輩に慕われていただけでなく、大谷さんの先輩方からも敬愛

されていたことが同窓会などでの様子からもよくわかりました。

大谷さんは名古屋大学プラズマ研究所、東京電気通信大学レーザー研究所へと移られながら大きく飛躍されていったことを実感していました。「大谷先生の思い出」というホームページにある大谷さんの業績を拝見しますと、今さらながらに足跡の大きさがうかがえます。私が述べるのは僭越ですが、研究のリーダーとしてはいうまでもなく、人としても偉大な方に成長され、大輪の花を咲かされたのだと思います。大谷さんとは同窓会などで時折お会いしておりましたが、常に人を包み込むような独特な大谷スマイルで接していただきました。時には叱咤激励されることもあり大きなエネルギーをいただいてもおりました。私がポスト探しをしていて困っていたようなときには親身にというか温かく心配していただいたことが思い出されます。こんなにも早く大谷さんとお別れしないといけなくなるとはまったく思いもかけぬことでありました。もっと年を取ってから村田研究室の仲間達と沼津の寮に出かけて海で魚釣りをし、酒を飲みながら語り明かすことも幻となっていました。今も大谷さんの温かい笑顔が私にはすぐ浮かんできますし、「難波 何やっどるか！」という励ましの言葉が聞こえてきます。大谷さんは私の偉大な学兄であり、私の人生にとってかけがえのない兄貴でありました。

写真3は記録には1973年の冬とありますが、確かどこかの研究会に共に向かう車中で発表原稿を準備している大谷さんの楽しそうなお姿です。

大谷さん ありがとうございます。
ご冥福をお祈りいたします。

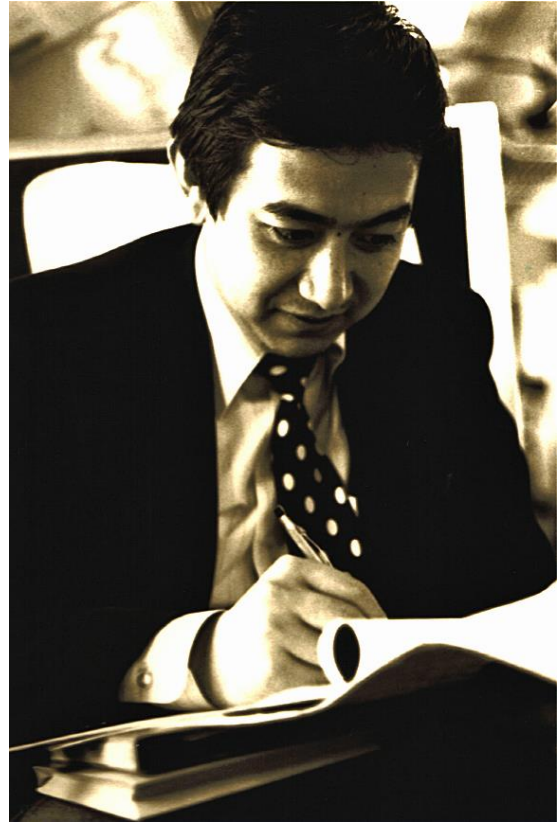


写真3 研究会のための発表原稿準備中の大谷さん